

**心とモノの魂について(河合俊雄)****モノ学の冒険 第1部 P87-P98****<要約>**

魂は人の心の中にあるのではなく、そこらじゅうにあまねく存在しており、時おり物体や事象に憑依(憑き物)して人の心に働きかける。憑かれたものがモノである。中心は人間の側ではなく、モノの側にある。向こうが先にある。これは古代人の考え方で、いわゆる近代的な発想とは真逆であるが、日本人の心にはフィットしやすいように思われる。しかし近年、モノと魂の関係が混乱した病的な人や事象を見かけるようになった。それに対する答はまだ出ていない。

**<各項抜粋>****1) モノの魂と投影する心**

P87 下 普通の心理療法は、モノの魂はないという立場に立っている。それに対して私などは例外的に、モノの魂はあるはずだと思っている

P89 下 心理療法は圧倒的にデカルト的な考え方に基づいている。デカルト自身は非常に狂った面白い人

P90 上 疑うということは、モノの魂を奪っていく、とても実存的な動きと考えられる

P91 下 モノの魂などを考える人はおそらく近代人ではない

**2) ユングと第三のものとしての魂**

P92 上 ユング派の心理療法は、人間に心や魂があると見なすのではなく魂とは二人にとって第三のものである、と考える

P94 下 決してこちら側、人間主観の側から始まらず、向こう側から、モノから始まる

**3) 否定性としての魂**

P95 下 魂は何でもないけれども、逆に何にでも受肉する

P96 上 モノ学は、ユングが理解している意味での心理学に他ならない

**4) 文化と時代**

P97 上 モノの魂に対する日本人の感覚、それだけモノを大切にする日本人の感覚については、もっと考えなければいけないように思われる

**5) モノは変わってきている**

P97 下 神経症ではない人が途方もない要求をしてくることがある

P98 上 モノに魂を認める古代の世界観とも、人間主体を中心として近代意識とも異なる

P98 上 モノの魂でも、投影する心でもない関わり方

\*\*\*\*\*

**<解釈の要点>**

近代科学の限界はもはや疑うべくもないが、そもそもデカルト思想はどのような時代背景から生まれたのか。その後継たる現代思想の系譜およびアンチテーゼ。日本人だからこそ感じられるモノの魂、そして魂の抜けたものに囲まれる虚しさ。危機に満ちた現代と、その打開へ向けての提言などをまとめてみました。